

2024年9月22日

年間第25主日

菊地功大司教 メッセージ

マルコ福音は、誰が一番偉いのかと弟子たちが議論していた話を記します。誰が一番偉いのかというよりも、自分が一番になりたい、皆の上に立ちたいというのは、人間社会につきものの、避けて通ることのできない欲望の一つです。

その弟子たちに対して、イエスは、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者となりなさい」と教えます。これは弟子たちに対する回答と言うよりも、この世に対する警告の言葉でもあります。この世界が価値があると定めるはかりではなく、神は、皆に使えるものとなるところに価値を見いだされる。神が良しとされる価値観は、弟子たちが捕らわれているような、この世の価値観とは全く異なっているのだと言うことを悟らせようとする言葉です。

受難と死へと至るイエスの生涯そのものが、人間の常識をはるかに超えた人生です。その人生にこそ、自らが創造された人類への愛といつくしみが具現化しています。神の常識は、人間がもっとも忌み嫌う、苦しみと死の自己犠牲の道にこそ、神の栄光と愛といつくしみがあるとするのであります。信仰の道は、わたしたちの常識をはるかに超えたところにあります。

その意味で、教皇がいま、教会全体に根付かせようとしているシノドスの道も、わたしたちの常識を遙かに超えた神の価値観の道のりです。まもなく10月には、今回のシノドスの第二会期が始まります。ローマでの会議は、それぞれの国を代表してレポートを発表する場ではなく、歩むべき道を見極めるための具体手な作業をする場となっています。

今回のシノドスは、シノドス性そのものを取り上げ、シノドス的な教会が宣教する教会であるためにどのような道を歩むべきかを一緒に識別するためのプロセスです。ですから、多くの人が期待しているような、具体的な事柄はなにも決まらないかもしれません。またこの10月の会議ですべてが終了するものでもありません。いま進められているプロ

セスは、終わりに向かっているのではなく、始まりに過ぎません。教会はこれから常に、シノドス的な教会であるために努力を続けていきます。なぜならば、神の民である教会は、その本性からしてシノドス的であり、ともに歩み続ける存在だからであります

教会に民主主義を持ち込むのではないかと、新しい政治的イデオロギーではないかと、この会期が終わるまでに日本では何もしないのかとか、いろいろな意見が飛び交っているのは事実です。しかしそういったことではなくて、聖母マリアと主イエスとの歩み、主イエスと弟子たちとの歩み、そういった教会誕生の原点にある姿を、確実に具体化して生きていこうとするのが、いまのシノドスの目的です。これからも長い目で見ながら、その具体化に努めていきたいと思えます。

聖霊の導きを識別し続けながらともに歩むこのシノドスの道のりは、簡単な道ではありません。時間と手間のかかることでもあり、まずもって忍耐を必要とします。同時にそこで見いだされる神の計画の道は、常に安楽の道であるとも限りません。なぜならば、神の救いの計画の中心には常に十字架の苦しみが存在しているからです。シノドスの道をとともに歩むことで、わたしたちは様々な困難に直面することでしょう。様々な意見の対立に翻弄されるでしょう。常識の壁が立ちはだかることでしょう。決断の及ぼす影響を考え、たじろいでしまうのかもしれないそのときにこそ、苦しみと自己犠牲の道にこそ、神は価値を見いだされることを思い起こしましょう。